茨城大学教育実践研究 35(2016), 41-56

大正期の子どもの絵に関する研究(1)

――『啓助日記』における挿絵を対象にして――

山 田 秀 平*・向 野 康 江**

(2016 年 10 月 28 日受理)

A Study of Child Painting During The Taisho Era (1912-1926) (1)
—To Target Art Work in "The Diary of Keisuke"—

Shuhei YAMADA and Yasue KOHNO

キーワード: 『骨肉』、向野啓助、日記、挿絵、想画、家庭教育、図画教育

これまでの美術教育史研究では、学校教育での図画教育に焦点があてられ、家庭でのそれはあまり注目されてこなかった。本稿では、家庭での図画教育に着目する。その例に、大正期に行われた向野家における家庭教育内の図画活動があり、そこでの子どもたちの図画活動を研究対象とする。就中、四男・啓助が記した『啓助日記』には多くの挿絵が描かれている。今回はそのうち「想画」に分類できるものを分析した。まず、向野家で行われた家庭教育の実践『骨肉』と『日記』の概要を確認し、『日記』の特徴、挿絵の分類を行った。次に 30 点存在する挿絵の内、「想画」に分類される挿絵 14 点を取り上げ、特徴を確認した。その結果、同じ家庭教育下で描かれた『日記』内の挿絵と『骨肉』内の作品とでは異なる特徴を所持していることがわかった。同時に、啓助自身のモノの捉え方や描き方の特徴を把握した。

はじめに

向野家の『骨肉』は、大正期に『新定画帖』による臨画教育から、山本鼎による自由画教育へと変遷する直前期に作成されている。それまでの臨画教育から写生画へと変わったことを、多くの美術教育史研究は、主に『新定画帖』などの教科書や学校で描かれた作品を研究対象とし、山本鼎による「自由画教育」を議論の対象として、その教育を受けていた当時の児童生徒が家庭でどのような図画活動を行っていたか、という議論は今まで進めてこなかった[1]。本稿では、児童が家庭でどのような絵を、どのような方法で描いていたかに焦点を当てる。分析対象は『啓助日記』とする。

*茨城大学教育学研究科　　**茨城大学教育学部

『啓助日記』は、大正期に福岡県福岡市内（当時、福岡市因幡町 31－2）に住んでいた向野堅一の四男・向野啓助が記した日記である。多数の挿絵が内包されている。当時、向野家の子ども達は家庭内で大正 2 年から『骨肉』という手作り雑誌を作っていた。雑誌『骨肉』は、その背景に遠く離れた満洲に住む父・堅一が、息子たちの作文の添削をしていたことから始まっており、家庭教育という性格を明確に有する。齋藤太郎（以下、敬称略）は「向野家の子育て、教育にとっても、この『父親不在』は大きな問題になりえたはずだった。そこで発揮された知恵・向野家の教育を特色づけることになったものは何か注目される」) と述べており、その特色づけるものとして『骨肉』と『日記』を例に取り上げている。つまり、日記も向野家にとっては重要な家庭教育の取り組みの一部であったということである。

問題と目的

『骨肉』作成以前に向野家で行われていた父・堅一による息子たちの作文添削について、堅一の曾孫である向野康江は「このような父親自身による 1900 年代における日本の教育実践例の軌跡は珍しい」[1] と述べている。また、大正期を代表する教育者佐々木吉三郎は、家庭教育の推進、家庭教育が学校教育の補佐的役割、家庭教育が学校教育の内容を踏襲することを推奨していた[2]。『骨肉』は当時の家庭教育の実践例としてめずらしいだけでなく、学校教育と違う特徴（方向性）を確認することができると言う点でもめずらしい[3]。

『骨肉』は、向野家の家庭教育方針を受けて作成されたものである。一方、もう一つの家庭教育実践例である『啓助日記』は、日記の個人活動的な側面を考えれば、学校教育や向野家家庭教育の教育内容からはある程度距離を置いた活動であったであろう。そこに描かれた挿絵は学校と家庭両者の意向（教育内容や目的）に規定されない状態で描かれたものだと推測する。

その点を検討する意味も含め、本拙論では大正４年の『啓助日記』内に描かれた挿絵 30 点の内、「想画」[4] に分類される挿絵 14 点を分析対象とし、どのような特徴が確認できるか分析する。その他 16 点の挿絵に関しては、頁数の関係上、別稿「大正期の子どもの絵に関する研究（2)」で紹介及び分析する。

［凡例］

・本拙論では、資料整理の都合上及び執筆の都合上、大正 4 年『啓助日記』中の挿絵のキャプションには〇付きの数字を、それ以外の図のキャプションには〇なしの数字を使用して記すこととする。

『骨肉』及び『日記』の概要と挿絵の分類

本項では、向野家の家庭教育において重要な役割を担っていたとされる『骨肉』と『日記』について先行研究をふまえて基本事項及び両者の共通点と異なる点を確認しておく。

(1)『骨肉』と『日記』について

『骨肉』の研究において、図画作品を対象とした先行研究は以下の5点が存在する。

A．向野　康江「1900年代の家庭教育における図画教育の成果」（INSEA2007年アジア大会論文集（英語版）、2007年）

B．西部こずえ「『骨肉』における漫画」（茨城大学大学院教育学研究科、2006年）

C．向野康江『子どものための美術教育』（弦書房、2010年）[5)]

D．千葉麻伊「骨肉における自由画の源流について」（茨城大学教育学部学校教育教員養成課程、2011年）

E．皆川真理「大正期の子どもによる手作り雑誌『骨肉』所収の図画の源流を求めて」（茨城大学教育学部学校教育教員養成課程、2015年）

雑誌『骨肉』とは、大正期、福岡県福岡市に住んでいた向野堅一の息子（長男・晋、次男・有二、三男・元生、四男・啓助）と従弟たちによって作られていた各号1部しか存在しない手作り雑誌である。現在存在が確認されているのは26号目（1巻1号～4巻4号）までで、これらが発刊された全てかはまだわかっていない。1巻1号が大正2（1913）年12月発刊、26号目の4巻4号が大正6（1917）年8・9月発刊となっている。Aに『骨肉』発刊の経緯や概要が詳しく述べられている。要約すると以下のようになる。

図1　第1巻1号大正2（1913）年12月，啓助8歳

父堅一は満洲で経済活動を行っており、福岡の家からは離れて暮らしていた。教育熱心だった堅一は、後妻の収子に息子たちの作文を送らせ、採点し、さらにそれぞれに合った課題を出し、福岡に返送していた。そして、大正2年9月、作文に付された堅一から息子たちに宛てられた手紙が『骨肉』発刊の契機となった[6)]。この手紙をきっかけとして、晋たちは約2か月後の大正2年（1913）12月に「骨肉會」[7)]を結

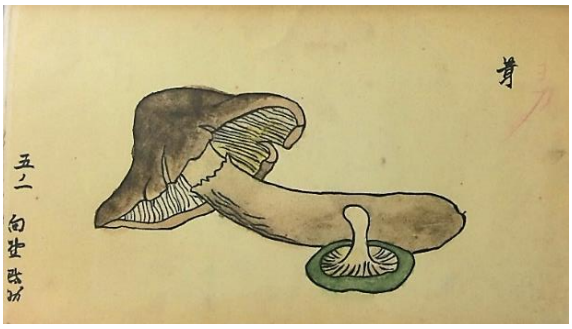


図2　「椎茸の絵」
第2巻7号大正4（1915）年12月，啓助10歳

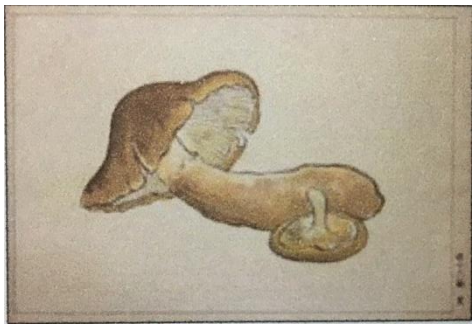


図3『尋常小学　新定画帖　第5学年用』
「第十六図　茸」（先行研究Aより）

成し、『骨肉』の第１巻第１号を発刊した。『骨肉』の中身は「図画の部」、「習字の部」、「作文の部」、「和歌・俳句の部」で構成されている。[8)] 特に「図画の部」の作品には互いに批評を記していることが注目される点である。

例えば、啓助が第１巻１号（1913 年 12 月）に掲載した作品（図 1）には、「道がみみぢのようだ」「道が手前も先も同じだからおかしい」「上手だが道が悪い」等と書き込まれている。８歳にしてはうまい方である。しかしながら、道の遠近法が破綻していることが指摘されており、他の者の作品においても遠近法の破綻が指摘されている。

さらにＡでは、当時の臨画教育の典型を示す『骨肉』内の作品が紹介されている。図２の「椎茸の絵」は、「五ノ一　向野啓助」と書かれているように、啓助が学校で描いた臨画作品である。臨画の下になった手本は『尋常小学　新定画帖　第５学年用』[9)]「第十六図　茸」[10)]（図 3）である。

また、啓助個人に言及した先行研究として、齋藤太郎氏が記した２点を挙げることができる。

Ｆ．斎藤太郎「一九一七（大正六）年向野兄弟の朝鮮・満州（ママ）旅行―『骨肉』・大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌（二）」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』第 11 号、2010 年）

Ｇ．齋藤太郎「正月を父と過ごす日々　―大正四年の啓助日記から―」向野堅一顕彰会研究部『向野堅一顕彰会会報』（第二号、2011 年）

Fにおいて齋藤は、「朝鮮満洲旅行記」と銘打たれた『骨肉』大正6（1917）年8・9月号に掲載された兄弟たちの旅行記の中で、旅程に沿って特に詳しく記した啓助の文章に焦点を当て分析を行っている。啓助の図画作品を分析対象とはしていないものの、一部の文章について啓助の記述の特徴を指摘している。

Ｇは大正４年の『啓助日記』の正月の記述、家に久々に帰って来た父堅一と過ごす啓助の日記に着目している。堅一に対する啓助の思いの記述の少なさから「もっと啓助自身の思いが記されていたらと思われる箇所もある。（中略）もっとも、身近に父が居て、日記が読まれることは確かという状況で父のことを書くということにためらいが伴うこともありえよう。記事の簡略さと、書き手の内面とは単純に結びつけてはいけない」[11)] と述べている。また、正月という時期柄、血縁・地縁の来客が多かったことが啓助の日記から読み取れることについては、「これは、子どもたちの成長や学習の環境として外せない点になるだろう」と指摘し、齋藤は父親と遠く離れて暮らす福岡の向野家にとって、『日記』は『骨肉』同様向野家の家庭教育の特色を示すものだと指摘している。

『啓助日記』における挿絵の性質

向野家の子どもたちが、子ども時代に記していた日記は、『啓助日記』の大正４年と８年のもの、『有二日記』の大正４年のもの[12)] のみを確認することができる。それ以外の兄弟及び年度の日記は存在を確認できていない。しかし、収子は大正７年、出先から「一　日記を御つけおき下され度候。一　金銭の出入はくわあしく御つけなされ度候」[13)] と記した手紙を、「晋　有二　元生　啓助」[14)] 宛てに送っていることから、日記を付けていたのが啓助、有二だけではなかったこと、大正４年および8年のみの活動ではなかったことと推測する。

図４
大正４年の『啓助日記』の表紙

大正４年の『啓助日記』の表紙には、大正８年と違い「骨肉會発行」と書かれている（図 4）。「骨肉會」とは前述のように、『骨肉』を作成するために結成された会である。挿絵と文章が共存している『啓助日記』は「図画の部」と「作文の部」等が存在する『骨肉』と似た構成と捉えることができる。「骨肉會発行」と書かれているということは、『骨肉』作成の一環として同じ構想のもと『日記』が作成されていた可能性を指摘することができる。「骨肉會発行」と記されているのは、『啓助日記』の用箋に、ガリ版刷りの自作の用紙を使用し綴じているからであろう（図 5）。

啓助は「骨肉會」オリジナルの用箋に存在する上段の空白に挿絵を描いている（図 5）。その数は多い。この上段の空白には、挿絵が描かれている日、文章を書いている日、空白のままの日が存在する（表 1）[15]。

図５　『啓助日記』（大正４年１月２・３日の頁）

	年齢	上段に挿絵	上段に文章	空白のまま	総日記日数
『啓助日記』（大正4年）	10歳	30日	21 日	63日	114日
『啓助日記』（大正8年）	14歳	0日			120日
『有二日記』（大正8年）	14歳	7日	76日	14日	97日

表１　日記の上段に挿絵と文章が書かれた日

図５の挿絵は、その日見た映画のシーンを描いた挿絵であり、「想画」と考えるのが妥当である（詳細は後述）。『啓助日記』の中に描かれている挿絵はこの「想画」に分類される挿絵が半分を占める。来客者等の人物の顔を描いたもの、風景を描いたもの等が「想画」に分類される。『骨肉』内の風景画はその写実性から実際に見て描かれている物が殆どであると推測できる一方、『啓助日記』に描かれている風景の挿絵は思い出して描かれたものだと推測できる。日記を持ち歩いてその場でスケッチしていたとは考えにくいからである。これらの挿絵は、「骨肉會発行」とされている『啓助日記』に描かれているものの、『骨肉』の作品に書かれているような批評は書きこまれていない。このことから、『日記』の挿絵は兄弟たちにとって批評の対象ではなかったと推測できる。収子が日記を書くように言っていること、齋藤も親が日記を見ることは確か、と言っているように、親が兄弟達の『日記』をチェックしていた可能性は非常に高い。しかし、兄たちの厳しい批評があったわけではなく、啓助もある程度自由な態度で取り組めたことが予想される。「骨肉會」発行であったからといって、『骨肉』のように兄弟で日記を閲覧し合い、意見を交わしていたわけではないことがわかる。

以上のことから、『日記』は文章と共に挿絵を描いている点に「作文の部」と「図画の部」が共存していた

分類	図番号	題材	対象	日付	日記の文との関係
想画	①	映画の登場人物	人	1月2日	○
	②	似顔絵（モデル不明）	人	1月27日	△
	③	似顔絵（福島大将）	人	2月9日	○
	④	映画のシーン	人＋α	1月2日	○
	⑤	馬に乗る福島大将	人＋α	2月9日	○
	⑥	風景①	建物	2月7日	△
	⑦	風景②	建物	2月11日	○
	⑧	風景③	建物	3月24日	△
	⑨	風景④	山	2月17日	○
	⑩	風景⑥	川	3月22日	○
	⑪	風景⑦	遊んでいる様子	1月24日	○
	⑫	風景⑤	遊びで作った炭鉱	3月12日	○
	⑬	風景⑧	遊んでいる様子	3月25日	○
	⑭	風景⑨	花火	4月20日	○
写生	〔1〕	静物①	筆	1月23日	○
	〔2〕	静物②	西洋紙と消しゴム	2月10日	○
	〔3〕	静物③	「しんかき」	2月12日	○
	〔4〕	静物④	万年筆	4月1日	○
	〔5〕	静物⑤	本	3月15日	△
	〔6〕	静物⑥	有二の作った工作物	3月11日	○
	〔7〕	信子がもらった人形	人形	3月14日	○
模写	〔8〕	風景⑧	船と海	1月28日	×
	〔9〕	風景⑨	灯台と海	2月1日	×
地図	〔10〕	地図①	本屋の場所	1月5日	○
	〔11〕	地図②	火事が起きた場所	1月26日	○
	〔12〕	地図③	あさりを取った場所	3月22日	○
	〔13〕	地図④	不明	3月31日	△
その他	〔14〕	落書き①	不明	2月18日	△
	〔15〕	落書き②	不明	3月4日	△
	〔16〕	落書き③	不明	3月7日	△

表２　大正４年『啓助日記』第１号　挿絵　分類表

『骨肉』との共通するありようを見出すことができる一方、その挿絵の内容や取り組まれ方（閲覧・批評体制）には『骨肉』とは異なる点があったと言うことができる。

挿絵の分析

挿絵の中で一番数が多い想画について見ていくことにする。挿絵 30 点を分類した表2[16]は、「想画」、「写生」等で分類後、「人」「建物」等、挿絵で描かれている対象を中心に分類し並べ変えた表である。この分類を元に、描かれている対象ごとに見ていくことにする。

人の顔を描いた挿絵

図①は、１月２日に描かれた挿絵である。同日の日記には「世界館で写真を見に行った。きゅうげき『ささのごんざぶらうよしかね』で中々面白かった。こつけい『上手下手』『へびのしゃうたい』などでこれも中中面白かった」と記されている。世界観とは大正２年６月 19 日に開場した福岡にできた最初の常設活動写真館である[17]。「活動写真」（啓助が書いている「写真」のこと）とは映画の事である。また、「きゅうげき（旧劇）」は「映画で、現代劇に対して時代劇（髷物）」[18]という意味である。図①に描かれている人物は、その外見を加味して考えると「ささのごんざぶろうよしかね」の登場人物であろうと推測する。「ささのごんざぶろうよしかね」は「笹野権三郎」のこと。図①には全体像が１人、顔のみが２人描かれている。登場人物の姿全体より顔を描きとめておきたかった、あるいは服装などの全体像は記憶に残っていなかった、ということであろうか。

図②は１月 27 日に描かれた挿絵である。左に「ガイゼルノタンヂから」と書かれている。１月

図①　「映画の登場人物」　１月２日

図②　「似顔絵（モデル不明）　１月 27 日

図6　ヴィルヘルム2世の写真

27 日の日記には「八龍のおいしゃんが来なしゃった。」と記されている。図②の挿絵において右側の人物はこの「八龍のおいしゃん」を描いたものだと推測する。

図②の左側の人物はドイツ皇帝（ヴィルヘルム 2 世）を描いたものと推測する（図 6）。図②の左端に描かれている「ガイゼルノタンヂ」の「ガイゼル」は「カイゼル」＝「皇帝」のことであろう。「カイゼル」は「日本ではウィルヘルム（ママ）2 世を指すことが多い」[19]。要するに「ガイゼルノタンヂ」はドイツ皇帝・ヴィルヘルム 2 世の事を指している可能性が高い。また、ドイツ皇帝の容姿として特徴的な「両端がはね上がった八の字形の口ひげ」[20]は「カイゼル髭」とよばれている。図②の左側の人物にも「両端がはね上がった」髭が描きこまれている。また、図 6[21]の写真でヴィルヘルム 2 世が被っている被り物は、図②の左側の人物が被っている被り物に似ている。以上のことから図②の左側の人物はヴィルヘルム 2 世を描いたものだと推測する。ただ、「ガイゼルノタンヂ」の「タンヂ」の意味は不明である。また、日記文にはヴィルヘルム 2 世の話題はなく、なぜこの 2 人が一緒に描かれているのかわからない。「八龍のおいしゃん」にヴィルヘルム 2 世の話を聴いて描いたのかもしれない。他の挿絵には、図②のように意味のつながりのない物が複数描かれている挿絵はない。描かれているものたちに意味のつながりがないカタログ的表現期[22]の名残であろうか。

図③　「似顔絵（福島大将）」 2 月 9 日

図③は 2 月 9 日に描かれた挿絵である。同日の日記に「学校より福島大将（福島安正）をむかへに行った」と書かれている。図③には「大将は六十四歳」と書かれている。このことから、図③に描かれた人物は福島大将[23]（図 7[24]）で間違いないであろう。啓助は「福島大将はシベリヤたんけんをした人であるが又九州たんけんをして居らっしやる又それは　馬にのってだ」（2 月 9 日）とも記している。

図 7　福島大将の写真

福島大将は大正 3 年以降の最晩年にかけて全国騎馬旅行をしたという[25]。2 月 9 日に描かれたもう一枚の挿絵（図⑤）には馬に乗る 2 人の人物が描かれている。日記に「学校より福島大将（福島安正）をむかへに行った」ある。図⑤は、全国騎馬旅行中、福岡を訪れた大将の姿を捉えたもので間違いないであろう。

図③において、福島大将の顔が青く塗られている。同じく顔が描かれている図①や②にはなかった表現である。旅行の際、日に当たった福島大将の肌が焼けていたのであろうか。あるいは、気に入らなくて塗りつぶしたのか。しかし、失敗した場合は別の紙を上から貼ることが啓助の方法であること[26]を考えれば、間違えが気に入らなかったから顔を塗ったということは考えにくい。

また、「後姿」を描いていることも、図③の挿絵を特徴的なものにしている。なぜ後ろ姿を描いたのか。福岡を凱旋する福島大将を出迎えた際、すぐ目の前を通り過ぎてしまった大将の後ろ姿を眺めている時間の方が長く、後ろ姿も印象に残ったということであろうか。図①や③のように、一時観た物を思い出して描いている挿絵には、見た印象を描き残そうという啓助の意思が読み取れる。

人を引きで捉えた挿絵

図④　「映画のシーン」1月2日

図④・⑤は、1月2日、2月9日に描かれた絵である。しかし、同日にはそれぞれ図①と図③が描かれているため、図④は1月3日に、図⑤は2月 8 日の欄に描かれている。図④は図①と同じくその日見た映画の絵、図⑤は前述のように、福島大将の絵である。図①や③と違い、人物の全体が描かれている。

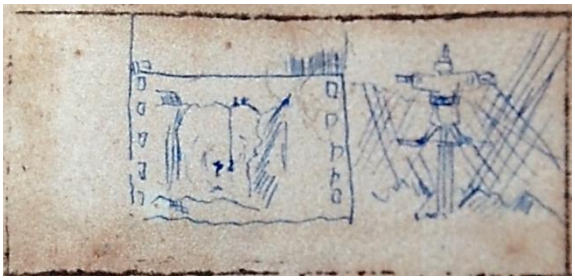


図8　『有二日記』　大正4年2月9日

啓助の兄有二(次男)は大正4年の『有二日記』において1月2日、図④に似た挿絵（図8）を描いている。同日、啓助と一緒に映画を観にいった有二は、観た映画について「笹野権三郎」のみを日記に記している。有二が描いた図8で描かれているシーンが笹野権三郎の映画のシーンと仮定すると、図8とよく似ている図④の右側は「笹野権三郎」のシーンを描いた挿絵ということになる。しかし、よく見ると両者には違う点が2つある。

1 つは服装である。図④で磔にされている人物の服装は、袴タイプで上下わかれている服を着ている。一方、図8では浴衣型の上下がつながったものを着ている。2 つ目は背景の描き方である。図④では斜めの線が敷き詰められており、図8の背景には斜めの線が描かれていない部分がある。

笹野権三郎の講談の内容は以下のような内容が一般的である。笹野権三郎は、育て親の仇を打つため、仇を探して旅をする。その際、冤罪でつかまり磔にされ、あわや処刑、という所で冤罪だとわかり、処刑の寸前で助かる、という話である。ということは、図④と図8に描かれている人物は、冤罪で磔にされた笹野権三郎と考えるのが妥当であろう。啓助と晋は同じ人物を描いている可能性が高い。上記の相違点から、何かを観ながらその場で描いたとは考えにくい。図④と図 8 の相違点は、印象に残った記憶を描く際に記憶の薄い部分を想像で補って描いた部分によって生じたものだと推測する。主人公があわや殺されてしまう、という物語の 1 つの山場を二人とも描いているのは興味深い。図④と図8の絵は「想像作用」を働かせて描いた「想画」であることを強く

図⑤　「馬に乗る福島大将」2月9日

示している。

図⑤は前述の通り、全国騎馬旅行で福岡に立ち寄った福島大将の姿を描いた挿絵である。図④同様、人を引きで捉え、馬に乗る大将らを描いている。進行方向前方（挿絵において左側）を歩いているのが福島大将であろう。図③に描かれている顎髭が図⑤の前方の馬に乗っている人物にも描かれている。また、福島大将の乗る馬と、後ろの馬とで鬣を描き分けていること、2 頭の馬の体系が少し違うこと、福島大将の髭などの細部まで描き分けていることがこの挿絵の特徴である。啓助の細かな観察が読み取れる。

ここでは、啓助が人物を描く際、顔だけに注目しているのではなく、人とそれに付随するものも描いることを確認しておきたい。人物という対象に寄った記憶を思い出すだけでなく、引きで見た記憶も思い出している。周りに何があったのかを観察し、それを思い出して絵を描くということは一定の困難が伴うことであろう。いろんな角度から 1 日の体験を思い出し描いていることは啓助の観察力の高さを示すものではないだろうか。

建物を描いた挿絵

図⑥は 2 月 7 日に、図⑧は 3 月 24 日に描かれている。しかし、日記文との関係が曖昧なため、どこを描いたものか確定できない。できる限り考察してみよう。

２月７日には「父は土手町にかべおこしに行かれた。夜新宅の祖母と世界館へ行った」と記されている。世界館の建物はレトロな建物であるため、図⑥のような外見ではない。どちらの建物も窓の数が上下５つずつ描かれている。窓を、四角形を並べることで表現する描写は『尋常小学　新定画帖　第１学年　教師用』[27] の 52 頁に掲載されている図 8[28] の手本にも確認することができる。屋根を台形で表現していることも共通している。

図⑥　「 風景（1)」　2 月 7 日

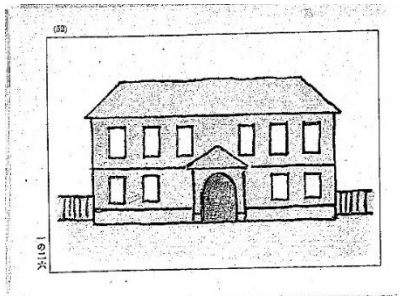


図 9 『尋常小学 新定画帖第１学年 教師用』52 頁

図 10　西中島橋付近を描いた当時の絵葉書

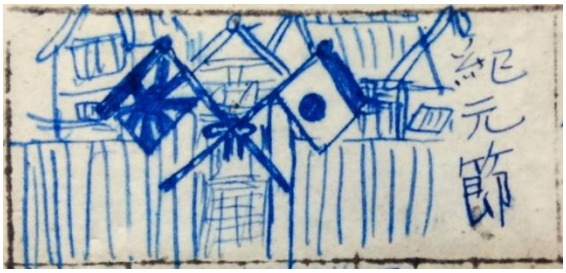
図 11　西町通りを写した当時の絵葉書

図⑥はどこを描いた絵だろうか。映画館までの道のりの建物、あるいは映画に出てきたセットだろうか。当時の福岡の街並みを捉えた絵葉書（図 10・11）をみてみると、確かに四角い窓と台形の屋根という共通した特徴が確認できる。一方、建物には細かな凹凸や装飾があり、個々に特徴を持っていることも確認できる。しかし、建物同士が似ており、幼心にはどれも同じ様な建物に見えた可能性もある。筆者の予想としては、図⑥に描かれた建物は、全体的にあいまいに描かれている事から、見慣れた街並みではなく、その日 1 度だけ見た映画のセットを思い出して描いた可能性が高いのではないか、と推測している。

図⑦は 2 月 11 日に描かれた、紀元節の風習を描写した挿絵である。2 月 11 日の日記には「一、今日は紀元節なるぞ。一、今日は朝に写真写りに行った。川島のおいしゃんとすもをとった。一、母や父は大宰府に参らる。一、午後父母をむかへに行ったその時はねをまわして行った」と記されている。2 月 11 日が紀元節である事をしっかり文章でも記している。また、写真を取りに行ったり、父母を迎えに行ったりと、色々なところへ出かけていることもわかる。その際に外で見た国旗を掲げている建物を思い出して描いたのが図⑦の挿絵だろう。図⑥と違い、建物の細部が描かれているため、普段から見慣れている、あるいは何度も見ている建物だと推測する。

図⑧が描かれた 3 月 24 日の日記には「一、学校で修業証書をもらった。母と有二兄は住吉へ行かる。いよゝ五年となった。しくだいが出た一日でしてしまった。飛行機をつくった。電報うちに行った」と記されている。線はあいまいなものの、図⑥とは違い立体的に、建物と建物の前後関係を意識して描いている。特に、真ん中に描かれている門の下方は立方体を俯瞰で見たように描いている。図⑧の挿絵は自分がその場にいるような臨場感がある。そのため、図⑧は学校の敷地内から門の外を見て描いた、もしくは電報を打つ施設の施設内から門の外を見て描いたものと推測する。

これら 3 枚の建物の挿絵はそれぞれ性質が違う。図⑥はかなりあいまいな線で遠くから建物の正面を描いている。図⑦は建物を正面から細い所まで描いている。図⑧はその場に自分がいる様な視点で主観的に描いている。



図⑦　「 風景（2)」　2 月 11 日

図⑧　「 風景（3)」　3 月 24 日

自然を描いた挿絵

図⑨ 「風景（4)」2 月 17 日

自然物を描いた図⑨⑩は、それぞれ 2 月 17 日、3 月 22 日に描かれている。図⑨を描いた 2 月 17 日の日記文には、「一、学校より帰着して遊んだ。一、それよりし科学校の裏までわをまわして行った」と記されている。「し科学校」はおそらく「九州医科大学」の間違いだろう。大正 3 年発行

図 12『骨肉』第 3 巻 2 号掲載　啓助
大正 5（1916 ）年 4 月

図⑩　「風景（5）」3 月 22 日

「最新実測福岡市街全図」[29]に記載されている福岡の学校一覧をみても「し科学校」に該当する学校はない。また、「九州医科大学」から南東方向（右下）に山が存在することが大正 9 年「福岡博多及郊外地図」[30]（図 14）よりわかる。山の麓には神社がある。図⑨の下方には△と□で構成された家らしきものが描かれている。上記の神社を描いたものだと推測される。

木の表現には特徴的な表現を読み取ることができる。中景ながら、省略せずに一本一本描いている。遠景を描いた図 1 は、木を 1 本 1 本描いてはおらず、絵の具で一面を塗って表現している。また、近景を描いた図 12 には、木の幹や枝葉が描かれている。しかし、図⑨の木の描き方とは大分異なる。図⑨が想画であること、中景であるのに木を一本一本描いていることが図 102 の木の描き方との差を生んでいるのだと推測する。また、図⑨が近景の山を描いたものだとしても、図 12 の木の描き方との違いは、図 12 と図⑨に 1 年間差があることに起因するものかどうかは、明確には言えないところである。

図⑩を描いた 3 月 22 日の日記には「川島の祖母さんとしげしゃんと信ちゃんと有しゃんとせりをつみに行った」と記されている。「せり」は「湿地やあぜ道、休耕田など土壌水分の多い場所や水辺の浅瀬に生育することもある湿地性植物」[31]である。3 月 23 日の上段にはこの場所を地図で記した挿絵が描かれている[32]。その挿絵には「川」「ここだ」と書かれている。図⑩は、川岸を斜線のみで埋めて表現しており、それ以外は空白のままである。周りには川以外にも他に描ける要素はあったはずであるが、それらは描かれていない。

以上の挿絵においては、啓助は体験したもの、見たものの中心を主に描き、それ以外（周りの風景）はあまり描かない傾向にある、と言えそうである。例外もあるが図⑧のように画面全体に手が回っているのはめずらしい。思い出して描いているため、一番印象に残っている物を描いているからであろうか。人物を描いた挿絵においても、図⑤などは、人物以外に今は描かれていても、その背景までは描かれていない。図④は唯一背景が描かれている。体全体が描かれていても、その背景は描かれていないように、建物全体、山全体は描かれていても、背景や周りの風景、空等は描かれていない。その中でも図⑧は例外で、異質な絵に感じられる。図①には山や田畑、空等、複数の要素が描かれていることから、挿絵に背景等が描かれていないのは、図 1 が写生であるのに対し以上の挿絵は想画であるからと推測する。

遊んだ時の様子を描いた挿絵

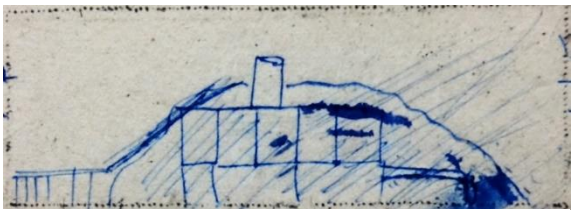
図⑪　「 風景（6)」　1 月 24 日

図⑪は 1 月 24 日に描かれている。1 月 24 日の日記には「そうしてわをまはしてよきやうちに行つた」と記されている。図⑪はその時の輪を回して行った時の絵であろう。珍しく自分の姿を描いている。ただ、自分の顔は描いていない。自分の顔を描くのは恥ずかしかったのだろうか。

啓助は一度、『骨肉』内で自分の顔を漫画の題材にされている。それは、『骨肉』第 1 巻 2 号（大正 3 年 2 月発刊）に掲載されている有二作の似顔絵漫画で（図 13)、兄弟たちがコメントで誰の似顔絵か当てようとしている。その中に「誰かに似ている？」「啓君に似てる」というコメントが確認できる。このことを先行研究 C で紹介している向野は、この図 13　の絵が、『名流漫画』[33] に多く掲載された有名人を滑稽に誇張して描いた似顔絵に影響を受けたものだと指摘している。この指摘からいけば、啓助は滑稽に誇張して描かれているということになる。

図 13　有二が描いた似顔絵

このことが自分の顔を描きたくなかった理由であろうか。大正 8 年の『啓助日記』には、「学校に行くと図画の時に又自画像の宿題を出される。本に苦しい。」「かへって自画像えお書いた。勿論宿題だ。何でもないのに書くわけはない。」とも記している。図 13 が描かれて以降、自分の顔を描くことが嫌になってしまった、と推測することができる。



図⑫　「風景（7)」　3 月 12 日

図⑬　「 風景（8)」　3 月 25 日

図⑬は 3 月 25 日に描かれている。同日の日記には「今日は有二兄と晋兄と元生兄とあばれた。はだしになって四人（晋、有二、元生）でおにごとをした。」とある。「おにごと」は「鬼ごっこ」のこと。しかし、図⑬の絵は鬼ごっこではなく、電車ごっこをしている様子を描いているように見える。また、4 人を描いているものの、遠く（小さく）て顔の細部が描かれていない。両端の背の高い人物が長男・次男（晋・有二)、その 2 人に挟まれている背の低い 2 人が三男・四男（元生・啓助）であろうか。自分を描きこんではいるが、図⑪同様、顔までは描かれていない。右の塗りつぶされた卵型のものは何か不明。図⑫は 3 月 12 日に描かれている。3 月 12 日の日記には「一、中野君の内に遊びに

行く。たんこうを造った。」とある。図⑫は図⑪や図⑬の様に遊びに関係のある絵である。遊んだ際造ったという「たんこう」（＝炭鉱）の絵だと思われる。しかし、図⑪や⑬の様に、自分や中野君は描きこまれていない。

図⑭ 「風景（9）」4 月 20 日

図⑭は 4 月 20 日に描かれている。4 月 20 日の日記には「夜みいちゃんとえきさんと母と信子と召使が共進会を見物に行かれた。夜はなびあがる。見物した」と書かれている。図⑭は花火の絵であろう。同心円状に斜線を伸ばし、飛びちる火花を表現している。しかし、花火というより爆発している感じに近い。一瞬ではじけて消える花火は、思い出して描くのが難しい題材の一つであろう。

図⑭も図⑫同様、花火を眺める自分や家族が描かれていない。これは図⑫・⑭以外の絵でも言えることで、むしろ図⑫・⑭が啓助の傾向に近い。上記、図①から⑭まででは、身近な人物が描かれている図⑪と⑬が例外ということになる。

以上、図①から⑭までの「想画」に分類される挿絵を見てきた。以上のことを含めると、自分を絵の中に描くか、描かないか、の表現の違いには大きな思考の壁があるように感じる。現代の児童にとっては絵の中に自分や友達を描き入れることは一般的なことであろう。絵に自分もしくは友達や家族を描き入れる、というのは、ただ単に描き入れる入れないの違いだけでなく、物の観察の仕方、思い出し方、頭に思い描くイメージが違う。啓助のような描き方が主観的であるのに対し、現代のような自分を絵に描き入れる描き方は客観的である。この変化がどの時代に起きたのか、注目される点である。

おわりに

本拙論では、これまでの美術教育史研究の中で、家庭内での活動に焦点が当てられなかったことに着目し、先ずは大正期向野家で行われていた先駆的な家庭教育、その中でも『日記』という活動に着目してみることにした。『啓助日記』内の挿絵を紹介、分析することで、今後の研究の基礎資料になることを目的とした。

１では、『骨肉』と『日記』の概要と特徴を、先行研究を元に確認した。両者を「骨肉會」が発行していることから、『日記』も『骨肉』と同様の目的のもと取り組まれていたものと推測された。

続いて２では、大正４年の『啓助日記』に描かれている挿絵について、分類及び日記文との関係性、何をどのように描いているか比較分析した。

大正４年の『啓助日記』内の挿絵は「想画」と思われるものが 14 枚と約半分を占めている。これは前述の通り、日記がその日起きたことを思い出して書く（描く）という性質のものであることが大いに関係していると推測する。これは写生や模写のアレンジなどの作品が多い『骨肉』とは大きく異なる点である。それらの挿絵には、想像で補って描いている部分が多くあるはずである。これらの「想画」は『骨肉』内の作品にはほとんど見られない性質の絵であり、それが『日記』の挿絵の約半分を占めている。また『日記』の挿絵には兄たちからの批評のコメントも描かれていない。

このことから、『日記』は「骨肉會」の発行であったものの、『骨肉』とはある程度距離をおいた活動であったことが伺えた。

以上、見てきた想画 14 点においては、記憶に残っている中心的なものを描きながら、全体像を描いている挿絵も存在すること、特に挿絵に周りの風景や建物、自分や家族などが描かれている挿絵が少ないこと、が気になる点として挙げられる。また、中でも図⑧が立体的な描き方を用いていること、他かの挿絵ち違い、主観的な視点で描かれていることも注目される点である。残りの挿絵について取り扱う次稿「大正期の子どもの絵に関する研究（2）」では、この特徴が想画であるからこその特徴なのか、また、共通した特徴はないか、等の視点で分析していく予定である。

注記

1) 向野康江「1900 年代の家庭教育における図画教育の成果」（INSEA2007 年アジア大会論文集（英語版），2007 年），1 頁.

2) 小林 嘉宏「大正期先進的教育学者における家庭と家庭教育―佐佐木吉三郎の新しい家庭構想と新しい家庭教育構想―」（福井県立大学論集 38 号，2012 年）

3) 佐々木氏が学校教育に沿うことを述べていると言うことは、当時の家庭教育が学校教育に沿っていなかった、ということを指しているだろう。しかし、こう述べる背景には、あまり上手くいかない、ノウハウがわからない家庭に対して、とりあえず学校教育に沿う形で始めてみませんか、という意図も感じることができる。そんな時代、独自の家庭教育を行っていた向野家は珍しいと言うことができるだろう。

4) 山形寛は『日本美術教育史』で「(a) 記憶画　物を見た印象を記憶していたものをかくことで、前時代の想像画、随意画、複画等を含んだものと解される。これが次の時代になると、それは単に記憶作用だけによるものではなく、そこには想像作用その他も含まれるものであるから、記憶画という名称は適当ではない。思想画又は想画とすべきだということになった。」（山本寛『日本美術教育史』（黎明書房，1988 年）347 頁）と述べている。本論文の言う「想画」とは上記の意味での「想画」である。

5) Ｃは英語版であるＡに西部論文（先行研究Ｂ）の紹介を加え、日本語版にしたもの。

6) 手紙の文は各先行研究でも引用されているものなのでここに文をのせることは避ける。手紙に記されていた主な内容は①それぞれ作文能力が向上していることがわかって大変うれしい。②満洲で離れて暮らすのが心苦しいなか、満洲で働いているのは息子たちを立身出世させたいから。③無駄遣いせず、勉強に励みなさい。④勉強ばかりではだめだから3分の1は運動しなさい。⑤晋、有二は兄として弟を導きなさい。⑥父の留守中は母が父の代わりだから、決して母に背いてはいけない。という6点であった。

7) 『骨肉』を発行するために兄弟・従弟たちによって結成された組織のこと。創刊号である第１巻１号には「骨肉會」の役員名が示されており、「会長」は向野拝三（堅一の甥）、「副会長」は晋、「閉部長」は有二、「集合部長」は元生、「請求部長」は啓助と記されている（先行研究Ａ参照）。

8)

9) 文部省『尋常小学　新定画帖　第５学年　教師用』（日本書籍，1910）（国立国会図書館蔵）.

10) 西部こずえ「『骨肉』における漫画」（茨城大学大学院教育学研究科、2006 年）.

11) 向野　康江「1900 年代の家庭教育における図画教育の成果」（INSEA2007 年アジア大会論文集（英語版）、2007 年）1 頁

12) 大正4年の『啓助日記』には、表紙に「第一号」と書いてある。日記が付けられている期間は1月1日から4月25日までで、内三日は抜けているため、合計で114日分の日記を確認することができる。第二号以降は存在を確認できていない。大正8年は1月1日から4月28日までで、120日分の日記を確認することができる。それ以降は存在を確認できていない。大正4年の『有二日記』も大正4年の『啓助日記』同様、表紙に「第一号」と書かれている。期間は1月1日から4月9日までで、内3日抜けている日があるので97日分の日記を確認することができる。こちらも第二号以降は確認できていない。この「第一号」というナンバリングの記述にもックナンバーを付していた『骨肉』の影響が確認できる。

13) 大正７年、「福岡県因幡町　向野晋殿」宛て

14) 手紙本文の末尾には「晋　有二　元生　啓助どの」と書かれており、本文は兄弟４人に宛てられたものであることがわかる。

15) 山田秀平「大正期家庭内図画の学校図画との乖離　―『日記』ならびに『骨肉』掲載向野啓助図画をめぐって―」向野堅一顕彰会『向野堅一記念館研究紀要・創刊号』第１号、2016 年，64 頁.

16) 図番号〔1〕～〔16〕は「大正期の子どもの絵に関する研究（２）」にて取り上げる際の図番号である。便宜上本稿でも表内のみに図番号を記している。

17) 井上精三『博多大正世相史』（有限会社海鳥社，1987 年）155 頁.

18) 新村出『広辞苑　第三版』（岩波書店，1955）606 頁.

19) http://dictionary.goo.ne.jp/jn/17338/meaning/m0u/ .

[20]) 同上.
[21]) http://www.wikiwand.com/ja/%E5%A4%A7%E9%89%84%E5%8D%81%E5%AD%97%E7%AB%A0 .
[22]) カタログ表現期について向野は「5歳までには、ものの形をそれらしく描けるようになって、記憶していることを絵のなかに表すことができるようになります。しかし、個々のものを同じ空間にあるものとして成立するようには描いておらず、（中略）ものの大小が区別できても、絵にはそれが表れてきません。この時期をカタログ表現期といいます」と説明している。（向野康江,『子どもの為ための美術教育』（弦書房，2010年）11頁）

[23]) 福島 安正（嘉永5（1852）年 ～8年（1919年）2月19日）は「日本の陸軍軍人。最終階級は陸軍大将。男爵。萩野末吉に続く情報将校。（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E5%AE%89%E6%AD%A3）
[24]) https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E5%AE%89%E6%AD%A3.
[25]) 同上.
[26]) 図5の右頁の挿絵（図①）は日記の紙とは違う紙が貼られ、その上から描かれている。挿絵でこのようにしてあるのは図5右頁の挿絵（図①）のみである。一方、文章の場合はこのように違う紙を貼り、その上から書いている頁が多くある。違う紙が貼られているのに空白の頁、あるいは半分だけ違う紙が貼られている頁（文章は違う紙と元々の紙にまたいで書かれている事もある）があることから、この違う紙を貼るという行為は、間違えた箇所を隠すために貼ったものであると推測され、図5の右頁の挿絵（図①）においても同様の意図があったと推測する。そのため、違う紙に実際見た風景などを見て写生した絵を、日記に切って貼った、ということは考えにくい。 以上、違う紙を貼るという行為は、間違えた箇所を修正する為に用いられた手段だと推測する。
[27]) 文部省『尋常小学　新定画帖　第1学年　教師用』（日本書籍，1910年）（国立国会図書館所蔵）.
[28]) 文部省前掲書，52頁.
[29]) 地理研究会「最新実測福岡市街全図」（弘陽堂書店，1914年）（福岡県立図書館所蔵）.
[30]) 大淵善吉「福岡博多及郊外地図」駸々堂旅行案内部，1920）（福岡県立図書館所蔵）.
[31]) https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BB%E3%83%AA.
[32]) 「大正期の子どもの絵に関する研究（2）」にて紹介している図〔12〕参照。
[33]) 森田太三郎 『名流漫画』（博文館，1912年）.

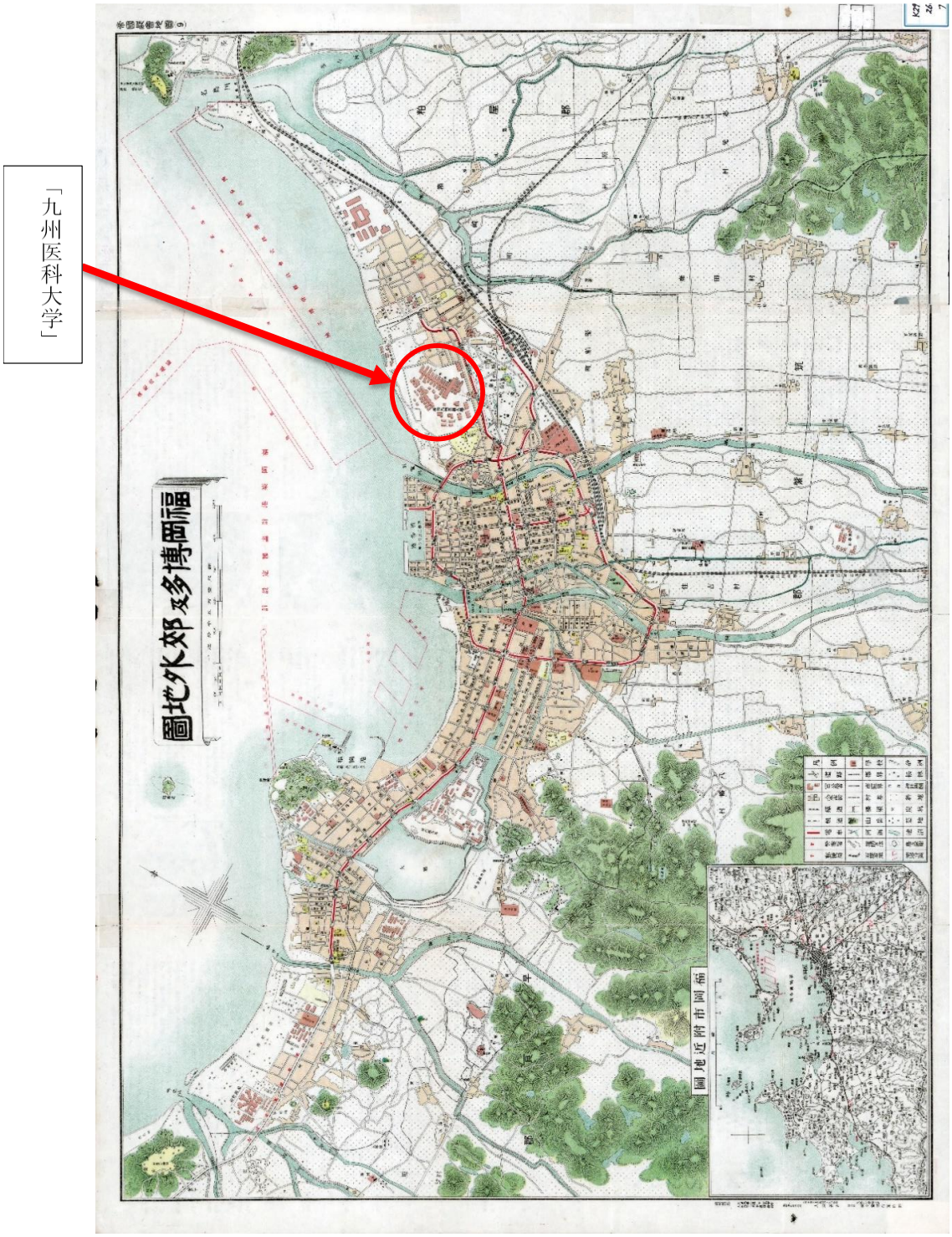


図 14「福岡博多及郊外地図」(大正 9 年)